



松崎 正寿

現在、日本でのゴミ処分は焼却が72.8%であり、全量焼却主義のにとられてゴミ処理施設が建設されている。しかし、そのゴミの多くは紙やプラスチック、生ゴミなどの資源化できるものであり、焼却しなくても処理できるものである。本計画では、行政のいまだ焼却至上主義に疑問をなげかけ、燃やして埋めるという現状の方式から、減量、分別、リサイクルへ、焼却から循環へと移り変わるプロセスの計画である。しだいに消えていく焼却プラントと、それにかわる分別、圧縮プラント、コンポストはこの土地の風景を変

え、徐々に広がっていく緑は圧縮された資源ゴミとコンポストされた堆肥とのコントラストを強め、アグリスケープとしての清掃工場をつくり出すことになるだろう。煙突なき清掃工場をめざして、ゴミ処理の根本を見直す時代となってきている。

指導＝高宮 真介

いま清掃工場は二つの意味で変容（トランスフォーム）が求められている。高度に機械化されたゴミ焼却施設は、まるでその中で行われていることを隠蔽するかのよう、外側は中味と全く関係なく、ときには西洋宮殿風まで登場する事態になっている。そんな都市施設のデザインは変わらなければならないと思

う。もう一つは、近い将来ゴミの減量化、分別化が進み、資源ゴミのリサイクルが進むと、焼却施設が漸減し、清掃工場そのものの概念が変わる時代がくる。地方都市の臨海部の埋め立て地に、実際に計画が進行中の清掃工場を課題にして、そのような変容を求めたものである。松崎君の作品は焼却施設として建てられた建築が、時間の推移に呼応して、分別や破碎のリサイクル施設に変容し、最終的には生ゴミからつくられるコンポストを利用した、農園や植物園で構成された立体公園を提案したものである。その変容の推移が、架構と素材の転用によって語られたこの作品は十分評価に値するものであると思う。

建築デザインII

課題
清掃工場のTransform
ートランスプログラミングと
ランドスケープデザインをとおしてー

住谷 覚



建築デザインⅡ

課題 都市の中の結節点 —「駅」を考える

担当：
小泉 雅生

住谷 覚

都市には道路、鉄道、地下鉄、運河などの様々な種類の都市交通がある。これらの移動手段は都市の中に線形に伸びる「線状の空間」を形成する。この移動のための線状の空間に対し「駅」や「ジャンクション」と呼ばれる、それらが分岐したり交差し

たりするポイント「結節点」が存在する。ここで人々は移動の速度と向きを変え、別の線状空間へとシフトする。この課題では、人の動きの節目であるポイント「結節点」とそこへ至る「線状の空間」を都市の中でどう位置づけるかについて思考を深めていく。なお、敷地は都市にある京王線の明大前駅とする。あなたが新しいまち（都市）に引越しをして最寄りの駅に行ったり、そこから我が家に戻ったときのことを思い浮かべてください。最初の何日かは必ず色々な道順で駅や我が家に向かうはず。そう、元来駅はこのような行動を誘発する場でもある。

このことから、都市の駅にシンボル性は必ずしも求めなくてもよいことが考えられる。むしろ、そこへ至る様々な経路の存在こそが都市の駅の姿であるといえる。電車は人やものを駅から駅へと運び、駅はまちの中の結節点である。電車の乗り降りの際、最初と最後の一步はプラットフォームの上で行われる。だから、プラットフォームは人が通過したり、たまったりする「道」であると考えられる。駅のプラットフォームを見てみるとその端部が行き止まりとなっており、有効的に処理されていないことが多々ある。乗り換え乗車率の高い明大前駅も同様で、ここでは一カ所でき動線処理が

されていないため、多人数の人の動きに対応しきれていない。そこで、プラットフォームの端部と端部をつなげることによって行き止まりをなくす。すると新しいみちができ人の動きの自由度が増すほか、キオスク等をそこに分散することもできる。次にプラットフォームと共通の要素を明大前駅周辺で探してみる。すると、駅周辺には多くの行き止まりのみち（端部）が存在することに気づく。プラットフォームの端部とまちのみちの端部をつなげることで、駅周辺の行き止まりをなくすことができようである。みちの端部からスロープが上がったり、下がったりして他の端部とつないでいくと人の動きはスロープの先にどんどん伸びていく。みちの端部と端部がつながり、新しい結節点がまちの中に次々と自己増殖していく。ひとつの駅がまちのみちとつながり新しい駅とつながっていくと同時に、駅の姿がまちの中に消えていく。

指導＝小泉 雅生

課題を行うにあたって、補足として①集積度の高い都市的な状況における駅、②モータリゼーションによって求心力を失いつつある地方都市の駅、の二つのタイプの異なる駅を提示した。住谷君の提案はその中で①の都市的な状況下での駅として明大前駅を取り上げ、駅内の移動空間やプラットフォームを街路同様に位置づけ、街の中での駅のあり方を見直している。結果として「駅」は街の中に姿を消していき、従来我々がイメージとして持っていた「駅」及びその周辺が全く異なった様相を示すというものである。この考え方は、多焦点化し様々なレベルでのネットワークの形成をしている現代の社会における結節点のあり方として、非常に刺激的な提案といえる。日常的な施設のあり方を問い直すことで新たな空間や風景の可能性を提示できたことは、TRANSFORMという共通課題に対するすぐれた回答だといえるが、望むらくは姿を消した駅周辺に生み出される新しい風景を鮮やかに一枚の絵として描き出してほしかった。さらにここには取り上げていないが、個人的には②の地方都市の駅に対しての前向きな提案が必要だと実感している。